

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	基礎看護学実習における「不易流行」:インストラクショナルデザインを用いてニューノーマル時代のトランスレーショナル教育を展望する
別タイトル	Continuity and change in fundamental nursing practicum : prospects for translational education in new normal era using instructional design
作成者(著者)	尾立, 篤子 / 瀧口, 千枝 / 林, 京子 / 水流添, 秀行 / 宮崎, 裕子 / 蜂ヶ崎, 令子 / 浅野, 美知恵 / 山本, 利江
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2023.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 6. p.23 34.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	総説
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohohsj.6.23
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28215526">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28215526</a>

## 基礎看護学実習における「不易流行」

—インストラクショナルデザインを用いて  
ニューノーマル時代のトランスレーショナル教育を展望する—

尾立 篤子 瀧口 千枝 林 京子 水流添 秀行  
宮崎 裕子 蜂ヶ崎 令子 浅野 美知恵 山本 利江

### I. はじめに

我が国の大学における看護学教育は70年以上にわたっており、その間、教育の質向上を目指して様々な取組みが行われてきた（文部科学省, 2019）。今回で第5次となるカリキュラム改正には、超高齢社会における疾病構造の変化、療養の場の多様化を踏まえ、地域包括ケアシステムの推進に向け、対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められていることが背景にある（厚生労働省, 2019）。

この看護基礎教育課程において、臨床看護実践のスタート地点に位置づけられるのが基礎看護学実習である。前半は1年次に人間関係の構築と日常生活援助、後半は2年次に看護過程の展開と日常生活援助を基本としてプログラム構成するのがスタンダードである。

本学のトランスレーショナル教育において旧カリキュラム（開学部2017年度から2021年度まで）では「看護入門実習Ⅱ」「看護実践の基礎」、新カリキュラム（2022年度から）では「看護入門実習Ⅰ」「臨床看護学実習Ⅰ」としてそれぞれ配置されている。

本稿のテーマは基礎看護学実習における「不易流行」である。「不易流行」とは、蕉風俳譜の本質をとらえるための理念として提起したものであり、いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくことで変革の時代を迎えるという意味を持つ（久保, 2017）。つまり、環境に適応して変化を続けることこそが永遠に変わらない存在であり続けられるという意味にも解釈できる。また、松尾芭蕉の「奥の細道」においては「変わらないものを理解しないで基

礎は成立しないが、変わるものを理解しないときには進展がない」と解釈されている（長谷川, 2007）。激動する社会の中で、基礎看護学実習は何を守り何を変えていくべきか、2022年度に旧カリキュラムの最終科目の一つとなった「看護実践の基礎」実習の教授を資料とし、インストラクショナルデザイン（Branch, 2009）を用いて新たな教育を展望する。

#### 1. 新型コロナウイルス感染症がもたらしたニューノーマルと臨床実習

2020年12月に端を発した新型コロナウイルス感染症は爆発的な感染拡大をもたらした国際社会を震撼させた。多くの国々で渡航制限や外出制限が実施されて人流が抑制された結果、世界経済が急速に悪化した「コロナショック」は今も続いており（経済産業省, 2020a）、教育や医療もその影響を受けている。

2020年5月、日本政府は新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を公表した（厚生労働省, 2020）。図1にその代表的な内容を示す。公表時は感染拡大による医療崩壊を防ぐことが重要課題であったが、ワクチン接種や治療薬の開発が進む一方で感染者の減少と増加を繰り返す状況から元の生活に戻ることは難しく、この「新しい生活様式」は、新たな常態を意味するニューノーマルをもたらした（厚生労働省, 2020）。

**感染防止の3つの基本:****①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗い**

- 人との間隔は、できるだけ2m(最低1m)を空ける。
- 会話をする際は、可能な限り真正面を避ける。
- 外出時や屋内でも会話をするとき、**人との間隔が十分に取れない場合は、症状がなくてもマスクを着用する。**
- 家に帰ったらまず手や顔を洗う。
- 手洗いは30秒程度かけて水と石けんで丁寧に洗う。
- ※高齢者や持病のあるような重症化リスクの高い人と会う際には、体調管理をより厳重にする。

厚生労働省(2020)「新しい生活様式の実践例」より一部抜粋して作成

図1 新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例

ニューノーマルにより、大学教育にも大きな変化が訪れた。新型コロナウイルスが世界的パンデミックをもたらした2020年初頭は、大学のキャンパスは閉鎖されて対面授業ができず、制度が整った大学からオンライン授業が始まった。続いて、教育施設の感染対策がとられると、オンラインと対面の双方を取り入れたブレンド型学習が開始した(除村, 小林, 飯尾, 井上, 2022)。看護学のような医療施設における臨地実習を必要とする医学系教育は、対象者を保護すると共に感染を抑制するという視点から一時的に臨地実習の受け入れが困難となった(日本看護系大学協議会, 2021)。その後、策定されたルールを順守することで臨地実習の受け入れが再開されるようになった。そのルールとは、新型コロナウイルス感染症に関連する実習中・実習前後の健康管理、受け持ち患者のベッドサイドでのマスク着用・適切な距離の保持・滞在時間の制限に始まり、休憩時間の黙食、カンファレンスにおける環境管理などである(日本看護協会)。一方、これまでの実習受入れの可否は、実習生側の健康状態に依存していたが、対象者の健康状態、つまり患者や病棟内に新型コロナウイルス感染症が発生した場合にも実習受入れができなくなる状況も起こっている。

ニューノーマルにおける臨床実習は、以上のような制約のある中で実施されるようになったため、限られた資源の中で教育成果を求めるには、基礎看護学実習の本質を見極め、学生の臨床実習における時間的経験の量が十分でなくとも、経験を意味づけしていく思考力や想像力を

高める教育が求められている(小川, 見城, 諏訪, 吉田, 原, 2022)。

## 2. 人間や社会を取り巻く劇的な環境変化と求められる対応力

2016年のダボス会議において「VUCAワールド」という言葉が用いられ、「現代はVUCA(ブーカ)の時代」が世界的な共通認識となった。VUCAとは、V (Volatility:変動性)、U (Uncertainty:不確実性)、C (Complexity:複雑性)、A (Ambiguity:曖昧性)を表し(表1)、変化が早く、不確実性が高く、先が読めない状況を意味する(布柴, 2022; 川本, 2018)。看護学教育現場の昨今の変化について、このVUCAの観点からみていく(表1)。

表1 VUCAの観点

用語	意味
Volatility (変動性)	変化の性質、量、スピード、大きさが予測不能のパターンをもつこと
Uncertainty (不確実性)	問題や出来事の予測がつかないこと
Complexity (複雑性)	多数の理解困難な原因、抑制因子が絡み合っていること
Ambiguity (曖昧性)	出来事の因果関係がまったく不明瞭で前例もないこと

参考: 布柴(2018)、川本(2022)、鈴江(2022)

Volatility (変動性) は変化の質や量、スピードなどが予測不能であることを示している。新型コロナウイルスが世界に拡大した驚異的な速度、気候変動をもたらす自然災害の激甚化と頻発化、IT社会における人間を取り巻く情報の入れ替りのめまぐるしさ等、これまで通常だと認識していたスタンダードが過去の情報となるまでにそう時間を要しなくなった(鈴江, 2022)。保健医療機関においては、医療費適正化に基づく在院日数の短縮化によって、入院患者の入れ替わりが激しくなっている(厚生労働省, 2022a)。その影響を受けて、学生が実習期間を通して一人の対象者を受け持てるという実習上の条件は当たり前ではなくなった。

Uncertainty (不確実性) は、問題や出来事の予測が困難なことを示している。2018年から続く米中貿易摩擦に加え、新型コロナウイルス

ス感染症がもたらしたグローバル・サプライチェーンの寸断リスクは日本の製造業に深刻な影響を与えた（経済産業省, 2020b）。しかし停滞していた世界の経済活動が再開すると、世界のエネルギー需要が高まり資源価格が高騰した。ロシアのウクライナ侵攻による資源の輸入制限もこれに拍車をかけたという近年の事例はこの不確実性を表している（総務省統計局, 2022）。

学生生活において予測困難であったこととして、登校しなければ出席扱いとはならなかった授業が、オンラインで自宅に居ながら受講できるようになった。同時期に、医療関係職種等の実習については令和2年2月に「実習施設等の代替が困難である場合、実情を踏まえ実習に代えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」が示された（文部科学省, 厚生労働省, 2020）。看護学実習が展開される場所が臨地であるというこれまでの固定観念が覆され、その時期の感染状況や施設の事情によって実習方式が左右されることとなった。

**Complexity**（複雑性）は、様々な現象が既存の枠組みを超えた多数の事業や活動、個人が深く関わっていることによる。コミュニティにおいては、文化や習慣、信念の多様性が存在し対立を生じさせることがある。そして教育の現場でも学生やその家族背景の多様性への配慮が求められている。臨床実習では、対象者をありのままに捉えその人らしさを尊重した看護を実践するために学修する（黒田, 船橋, 中垣, 2017）。複雑な社会で生きる対象者を多様性を持つ学生が受け持ち思考するという複雑な現象に対し、教育者は自身の経験に基づく枠組みだけでは説明ができないことを理解しておく必要がある。

**Ambiguity**（曖昧性）は、前述した3つが組み合わさることで、因果関係が不明で説明が難しく、過去の実績に基づいて対策を講じることが通用しない状況である。これまで体験したことがないような曖昧な現象を目前にした時、そ

れを既成の枠組みに当てはめようとしても無理が生じる。新たに生じる曖昧性にはそれを受け入れる柔軟性が不可欠となる。

以上のように、新型コロナウイルス感染拡大によって、今までのモデルや規範が通用せず、潜在していた脆弱性を露呈させる結果を体験することとなり、看護学教育現場で私たちは今まさに「VUCAの時代」を実感しているのである。

このような激動の時代に看護専門職を志す学生の養成機関は、教科書的な知識や教育者の経験を教授する旧態依然の教育法だけでは、未来に起こる‘予測困難な出来事’への対応は困難となっている。

## II. 基礎看護学実習のインストラクショナルデザイン

2022年度の「看護実践の基礎」は、7月19日（火）～29日（金）までの10日間を予定していた。前半の臨床実習1週目を終える頃、新型コロナウイルスの国内の新規感染者は15万人を超えて第7波の急拡大を見せており（厚生労働省, 2022b）、実習施設がその余波を受けたことから施設側の要請があり、実習病棟での実習が困難な状況となった。さらに、本学の関係者にも感染拡大の影響が及び、教員・学生が臨床の場である病院に感染リスクを持ちこむリスクが高まったことから、病院での実習を中止し、オンラインと対面によるブレンド型実習に切り替えることとなった。予定とリスクスケジュールした実習計画を示す（表2）。

ここで、インストラクショナルデザインを用いて実習の教授プロセスを記述し、改めて基礎看護学実習のあり方について展望する。インストラクショナルデザイン（Instructional Design：以下ID）とは、教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またそれらを応用した学習支援環境を実現するプロセスと定義される（鈴木, 2005）。それを代表するモデルの一つにADDIEモデルがある。ADDIEとは分析（analyze）、設計（design）、開発（development）、実施

(implement) ,評価 (evaluate) のプロセスをいい、その概要を示す (表3)。

1. 分析 (analysis)

実習オリエンテーションで示した実習計画から変更となった学生のニーズは、「やっと実習に慣れてきたのに」「これからようやく受け持ち患者に対し日常生活援助を実施できるのに」と、もっと臨床実習を続けたいという声が多く聞かれた。対象学年の学生は新型コロナウイルス感染症の影響により、1年次の「看護入門実習Ⅱ」が学内実習に代替されており、この実習が初めての臨床実習であったことから、臨床実習が再び中止になったのかという思いが背景にあったと推察する。ここでは、臨床実習が学内 (オンライン) に代替されたことで、実習目

標を変更するわけではないこと、また実習評価が下がることもないことを説明する必要があった。同時に、前半の経験を活かして後半の実習を継続させるため、実習は分断されないことを伝達することも必要であった。

一方で、感染拡大下に細心の注意を払い、健康管理しながら臨床実習に通った学生が学内に戻ってくることで気が緩み、後半の実習に参加できないという状況とはならないよう、実習最終日までこれまでと同様に感染予防を中心とした健康管理を行うことも重要な事項となった。つまり、予定が急遽変更となり実習環境が変わったとしても、科目としての基礎看護学実習は継続しているという認識を対象である学生および教員が共有することが必須であった。

表2 2022年度の基礎看護学実習計画 (予定と変更した内容)

週目	期日	実習内容	
		午前	午後
1	7/19(火)	病棟オリエンテーション	シャドウイング
	7/20(水)	シャドウイング	患者紹介/情報収集
	7/21(木)	情報収集	データベースアセスメント
	7/22(金)	データベースアセスメント(全体像の把握)/中間カンファレンス	
	7/23(土)	関連図・問題抽出・総合アセスメント・問題の明確化・計画立案	
2	期日	【変更前】	【変更後】
	7/25(月)	看護計画立案・発表	ケースカンファレンス
	7/26(火)	看護計画立案・発表/ケースカンファレンス	記録類
	7/27(水)	看護計画実施・評価/最終カンファレンス	臨床実践レクチャー/課題GW
	7/28(木)	個人面談(学内学習)	学びの報告会/記録
	7/29(金)	実習のまとめ(学内学習)	個人面談/実習のまとめ

表3 ADDIEモデルの概要

ステップ	概要
Analysis(分析)	「教える理由」「対象者」「ゴール」を明確にする
Design(設計)	「何を」「どんな順番で」「どう」教えるかを定める
Development(開発)	設計に従って教材・ツールなどを実作する
Implement(実践)	設計に従って与件のもと、教育を実施する
Evaluate(評価)	ゴールに沿った方法を使って評価・再分析・再設計をする

## 2. 設計 (design)

実習第1週目を終え、臨地から学内への実習に切替わった時の受け持ち患者に関する記憶が鮮明な状況で時間を置かず、実際の対象者の情報に基づいた看護過程を展開することを優先した。従って、まずはオンラインで学生による看護過程の展開を担当教員が個別にサポートした。

本実習において、重視する学習上の学びは実習目標に照らし、

①受け持ち患者の療養の場となる入院生活は受け持ち患者にどのような影響をもたらしているか

②受け持ち患者や医療チームの関係者に対し、看護者はどのような姿勢、コミュニケーションをとることが望ましいか

③看護するとはどういうことか

④看護上の倫理的場面とはどういうものかとして焦点化した。

学生の臨床実習での経験が十分でなかったとしても、シャドウイングで見て感じたこと、実際に入院している受け持ち患者を見て捉えたことを踏まえて、それを体験から経験として意味づけしていくための「臨床レクチャー」を計画した。

続く「学びの報告会」では、看護実践の基礎実習における個々の体験をふり返り、グループ討議によって意味づけをし、その学びを経験知として共有することを目的とした。環境変化、コミュニケーション、看護展開に関する3つの課題を提示してグループワークを行い、オンラインでの発表と聴講に関するルールを規定して報告会をすることとした。

## 3. 開発 (development)

「臨床レクチャー」は臨床実習に同行した教員のうち3名が担当した。教材開発にあたって重視した事項は、前述した実習目標に照らした4つの事項であり、その中に実習中に見られた学生の言動や体験を教材に取り入れることであった。

- ①「臨床で起こる倫理的問題に気づく」
- ②「実習でとらえた『看護』について考える」
- ③「臨床コミュニケーション—関心を持つ、聴く、伝える—」

という3つのテーマで教授した。実際の教材の一例を示す(図2)。

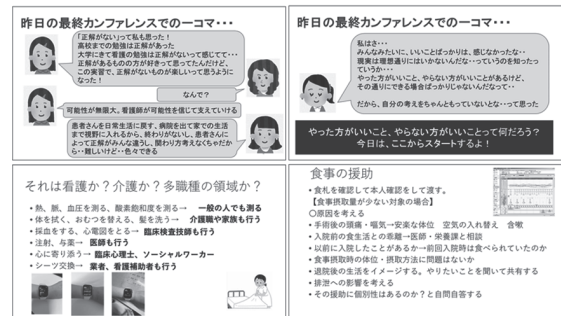


図2 臨床レクチャーの教材(一例)

## 4. 実施 (implement)

①「臨床で起こる倫理的問題に気づく」では、病院での実習最終日のカンファレンスとやりとりから、臨床では「やった方がいいのにやられていないこと、やらない方がいいのにやられていることがある」という意見から患者の療養上で起り得る倫理的ジレンマについて事例を通して思考させる内容とした。また、倫理的の解決プロセスには状況を明確につかむ倫理的感受性が求められ、倫理的推論をする時のツール、インフォームドコンセント等について扱う内容となった。

②「実習でとらえた『看護』について考える」では、まず数日間の臨床実習で実際の療養環境をどのように観察してきたのか想起してもらうことから始まった。そしてシャドウイングで見た検温、清拭、検査、注射、リネン交換等は看護職でなくとも実践することがあることを示唆したのち、改めて看護とは何かを考えさせる内容となった。

③「臨床コミュニケーション—関心を持つ、聴く、伝える—」では、受け持ち患者とのコミュニケーションはどのような体験であったかを事例を用いて振り返りをした。その体験を踏まえて、どのようなコミュニケーションが望ま

しいのか、また非臨床コミュニケーションとは異なる点はどこかを思考させる内容となった。

「学びの報告会」では、前述した3つの課題である環境変化、コミュニケーション、看護展開プロセスの必要性について個人ワークをしてからグループ討議に臨んだ。グループワークで行うことのルールを規定し（図3）、全員参加型の発表形式をとった。ここで、発表の最後に「看護とは何か」について一言で表現することにも挑戦してもらった。

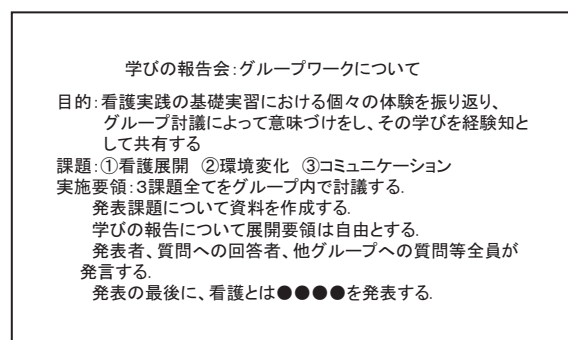


図3 グループワークにおけるルール（一例）

## 5. 評価 (evaluate)

本実習におけるゴールは、学習環境が変わったとしても、基礎看護学実習として最後まで適切な緊張感を維持しながら継続して学び続け、目標を到達することであった。学生個々が受け持ち患者に向き合い様々な思考過程を経験する本来の臨床実習と、自宅からのオンライン参加、または学内での実習で全員が課題に取り組む実習とでは環境が大きく異なる。後者となった時に集中力を維持しながら臨場感をもって実習し続けるためには、全プロセスにおける現在の立ち位置を常に示すこと、その日に取り組む目の前の課題がどのような意味を持つのかを提示すること、個人の学びや思考が共有されることで臨床実習にも劣らない学習ができることを経験してもらうことが必須である。

本実習は例年通りの臨床実習で開始したものの実習期間の半分は学内実習となった。その実習評価点は、臨地での実習を完遂した前年度の実習評価の平均点および標準偏差と相違なく、

実習環境が変化しても実習目標が到達できるという結果を得た。また実習終了後のアンケートにおいても、ほとんどの学生が実習を終えて看護への意欲が高まった、実習目標を到達した、看護への理解が深まったという項目について高評価をつけており、全期間のうち全日が臨地での実習でなくとも、基礎看護学実習としての学びを得ることが可能であることが示唆された。

また、このような評価を得ることができた背景には、本学が開学時より推進しているトランスレーショナル教育（浅野, 2020）の理念がある。平時より、関連知識・技術の転移や、臨床と基礎教育を意図的につなぎながら学ぶことがノーマルになっている本学部にとって、臨地での学びと学内実習をトランスレーションする今回の実習形態の変更は違和感のない変更であり、それゆえ、教員、学生共にスムーズかつ効果的に対応できたと成果といえる。

## III. 基礎看護学実習の本質と変化するもの

ニューノーマルかつVUCAの時代においては、看護学実習の環境が常に変化する可能性を潜めており、本来学修すべき事項を押さえ修得してもらうために、まず実習を中断させないECP（Education Continuity Plan：教育継続計画）（Hirsh, Ogur, Thibault, Cox, 2007）への心構えと準備が必要である。急に実習の中断や変更の情報が入り次の環境を整えるその間にも、学生が今何をなすべきかを明確に提示しながら教育を止めないという継続性を保証することが実習の基盤にある。

### 1. トランスレーショナル教育の入り口として基礎看護学実習が担うもの

基礎看護学実習は、臨床看護の入り口にあり、病院に入る前に整えておくべき健康管理や身だしなみ、態度、心構えなど学ぶ者としての心得に始まり、白衣を着た看護学生としての病院内での立居振る舞い、思考の仕方、ルールに関するコンプライアンス精神の涵養、エラーやミスが生じた時の行動の仕方などを修得する道

程にいざなわれる。そこでは、受け持ち患者と家族、病院内の全ての来院者に配慮をする医療サービス提供者としての立場を認識しながら行動する体験をすることで、看護を学び始めた学生の意識に発展的变化をもたらす可能性がある。

特別な体験をしなくとも、白衣を着用して病院に足を踏み入れる緊張感を味わうこと、ニーズの未充足がある療養中の患者が目の前に存在していること、看護師が患者や家族、病院内の多職種とコミュニケーションをとって連携する姿を見ることでリアリティを経験し、次の課題に向かって歩み始める推進力となる。

このことは、今回のように実習形態が変更するような状況となっても、基礎看護学実習が担うものとして変わらない。

## 2. シャドウイングを通した看護実践を感受すること

初めて臨床看護の現場に足を踏み入れる学生は、ナースステーションではどこに立てばよいのか、看護師にはいつ話しかけてよいのか、病棟の廊下はどれくらいのスピードで歩けばよいのかなど、病棟オリエンテーションでは説明しきれない暗黙知を五感で感じ取りながら、その場にふさわしい言動を修得していく (Patricia Benner, 2001/2005; 藤代, 小林, 渡部, 2016)。

そして看護師の国家資格を持たない看護学生は、病棟看護師のシャドウイングをすることにより、看護実践のリアリティを体験することができる (小林, 藤井, 片山, 児玉, 2018)。

「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告 (文部科学省, 2019) では、学生の患者選定の難しさに加え、学生が体験できる看護ケアの少なさや内容の制限、臨地実習での経験を活かせる効果的な学修の連動等が課題として示されている。前述したように、臨床実習がいつ中止となるかわからないという不確実性を持つ現代では、看護師のシャドウイングを通して看護実践を感受する体験 (馬場, 本田, 中西, 2021) が、受け持ち患者への部分的

な関わりという断片的な二次元の世界をつなぎ合わせてくれる。

また、指導者は臨床看護における役割モデルだけでなく、教育者としてのモデルも示してくれる。前述の報告書に続く第二次報告 (文部科学省, 2020a) では「実習指導者は (中略)、学生との関係性を構築し、看護学実習に臨む意欲を引き出すように支援する」とあり、それを体現する指導者は、患者に対する看護ケア提供者と学生に対する看護教育者の二つの役割を同時に果たしており、指導者のプロフェッショナルリズムを間近で感じさせてくれる。様々な条件下で対象者に合わせて創造的に対応する看護師の職人ともいえる技をもって「看護はアート (art) である」と説明することはそう難しくはない。

シャドウイングは見学実習とは異なる。看護師の後をついて看護師の言動や実践の現場を見学するだけでなく、看護師と患者や家族のいる空間に入り込み、専門的な技術の提供はせずとも、学生として居合わせるという体験を持つことが望ましい。臨床現場での居かたを看護学生が基礎看護学実習という早期に修得することによって、その後に臨地実習を積み重ねていく過程で看護の場面に自然に溶け込みながら学びを得ることを可能にする (平良, 梶山, 室伏, 鈴木, 2017) もので、いつの時代も変わらない。

## 3. 入院生活は地域で暮らす対象者の生活の一側面であるという理解

健康上の問題があり検査や治療を要して入院する対象者は、言うまでもなく地域で暮らす生活体である。入院するまでに維持してきた生活習慣や社会とのつながりは、入院生活に伴ってあらゆる制約を受けて変化する。その変化した生活を患者の日常ととらえてしまえば、自立に向けた真の看護は提供できない。疾患を持つ対象者に対し、その疾患や治療を理解することも欠かせないが、普段の生活はどのようなもので、戻りたいと患者が望む元の暮らしにどれだけ近づけることができるのか、つまり入院生



活はそれに向けたプロセスである（菊池, 若澤, 2022）。従って、基礎看護学実習では看護学生が学内で修得した看護技術を実習中に実践することを優先させるのではなく、行おうとする日常生活援助は本当に必要なものなのかどうかを見極める思考過程こそが重要である。

間もなく多死社会を迎える日本では（総務省統計局, 2023）、病院で最期を迎えることが当たり前ではなくなる。人生の最期を迎えるまで、対象者の持つ力を発揮させ、健康障害に適応する方略を持つよう支援するという看護の姿勢（土井, 山本, 杉本, 2010）は、これまでも、そしてこれからも変わらない。

#### 4. 臨床看護をブレンド型実習で学ぶためのコミュニケーションスキルの獲得

臨床実習において、対象者との信頼関係を築くことはもちろん、指導者を含む医療関係者との適切なタイミングで適切な用語を用いたコミュニケーションを、これまでの基礎看護学実習でも重視してきた。今回のようなブレンド型実習となった時に、臨床に居られた時間が少なく、臨床コミュニケーションの場面は限られる（川村, 岡本, 森岡, 2022）が、それを振り返り、自身がどのように考え相手に伝えたのか、一方で対象者はそれをいかに感じ取ったのかをリフレクションして意味づけするプロセスは、学生にとって貴重な教材となる（黒田他, 2017; 島津, 船場, 小原, 松田, 2021; 道廣他, 2018）。

ここで実習におけるオンライン参加について課題がある。講義の場合は、指名されたり挙手した学生が発言することはあるものの、教員から発信される情報を受動的な姿勢で聴くことが多い（川村他, 2022）。オンライン参加による演習では、まず学生が主体的に参加していることが必須条件であり、教員からの教授内容やコメントに回答したり相手がわかりやすいと考える表情を加えて反応するスキルが必要である。加えて学生同士でその場を作り上げていく能動的な姿勢が求められる。他の学生が発言している時にどのように反応するのか、その反応はど

のタイミングでフィードバックするのか、思考しながらインタラクティブなやり取りができることが望ましい（安酸, 2017）。

その結果、それまで情報の受け取り側だった学生が、立場が変わり全体への発信者となることで、その場に対する責任感やコミットメント力が自然と培われる。これもコミュニケーションスキルの一つであり、ニューノーマル時代においては、基礎看護学実習から重視していくものとなる。

#### 5. 基礎看護学実習中に知と実践の統合を試みることの意義

これまでの実習形態は、臨床での実習期間に教育効果を考慮して学内日を組み込み、臨床での経験を看護実習記録に記載しながら、思考過程の整理をしてきた。

今回は実習の開始後に予定が変更となり、急遽準備した「臨床レクチャー」によって前半の実習の個々の体験をリフレクションする機会を得た。その結果、続くまとめのグループワークでは、学生が能動的にオンライン実習に参加し、自身の体験を意味づけするという様子が見えかけた。

筆者らはこれまで、臨床実習中は実習後の看護記録やまとめをするものという教育者としての固定概念を持っていた。今回、臨床実習中であってもタイミングよく講義を組み入れることによって、実習とはいえ看護実践のできごとを、看護倫理など看護学の基本概念で説明する、知と実践の統合が効果的にできる（藤本他, 2011）ことを学んだ。さらに、まとめの報告会を終えた最後に、ヴァージニア・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」の一節を教員が読み上げたことで、先人によって生み出された看護の知の偉大さを学生ばかりか実習指導にあたった教員も改めて実感することとなった。基礎看護学実習中は臨床実習を中心に行うという概念からパラダイムシフトし、理論つまり、知と実践の統合（川嶋, 2010）を意識してプログラムを組む（宇野他, 2022）ことを試みたい。

## 6. 学生のタスク遂行力を高めるための教育システムの構築

初めて臨床実習に向かう看護学生はとても緊張している。教員や臨床指導者は学生および学生の影響が及ぶ対象者を事故やリスクから守るという役割がある。一方で、学生の行く道に先回りしてどれもこれも指示したり説明したりしては、学生が自ら考え行動し、その行動を振り返り、もっとうまくできるようにやり方を工夫して次に向かう、という機会が減ってしまう（古村, 松本, 前田, 2021）。

対象者に有害事象が発生しないように配慮することを前提に、学生に自ら考え行動できる機会を提供し「うまくいかなかったこと」を体験させることは、学生自身のタスク遂行力を高めることにつながる（谷口, 武田, 宗像, 2011）。変化が早く、不確実性が高く、先が読めない時代に看護師になるこれからの人材には、困難な状況にあってもタフさをもって最後までやり遂げる力を備えさせたい。

そのためにはまず、基礎看護学実習における学生の評価では、実習期間中にうまくできなかったことが反映されないようにしたい。学生が試行錯誤することを容認し（永井, 本江, 2022）、プロセスを経ていくための心理的安全性を保証（朝倉, 2022）すると共に、最終段階の到達度を評価する教育システムへの変更が課題となる。

## 7. VUCAの時代に看護職人材育成をしていくためのDX導入に向けた準備

AI (Artificial Intelligence) 時代の到来により、今ある職業の多くはAIに置き換わると言われている（Frey & Osborne, 2013）。その中で看護職は人のこころを扱い、高度なコミュニケーション能力が求められるため、AI時代にも生き残る職業である（Frey & Osborne, 2013）。しかし、VUCAの時代に看護職の人材育成は容易ではなく、看護基礎教育という医療資格を持たない学生の臨床志向の教育はなお難しい。

文部科学省は「ウィズコロナ時代の新たな人材に対応できる医療人材養成事業（令和3年度補正）」を始めとして、ニューノーマル時代のオンライン教育やシミュレーション教育をDX (Digital Transformation) の技術を活用して教育の質を向上させることを提示した（文部科学省, 2021）。これを可能にするためにはICT (Information and Communication Technology) の環境整備に始まり、何を学ばせるのかということを確認した上で教材開発をすることが必須となる。例えば、臨床のVR (Virtual Reality) の事例研究として、療養環境や受け持ち患者を想定するだけでなく、看護が生き残る職業である所以の、高度なコミュニケーション能力を養成（高林, 2022）するためのプログラムが不可欠であることを記しておく。

## IV. おわりに

本稿は、劇的な環境変化の影響を受けた一つの基礎看護学実習の経験から、ニューノーマルという新しい時代のトランスレーショナル教育を展望した。ここで最も重要であったことを2点にまとめる。看護実践の基盤となる最初の実習であっても、対象の理解や対人コミュニケーションを体験的に理解し、素人から医療人へ意識を変革する姿勢や、対面はもちろんオンラインでのコミュニケーション力の獲得とともに、臨床倫理など、看護学が明らかにした知識で実習経験を説明することは可能である。

実習における学生の看護場面を教材として位置づけ、看護と学習の両面からその意味を捉える時間を、教育者、臨床指導者によって共有されることが望ましい。

これら2点は、本学が推進しているトランスレーショナル教育の理念そのものであり、これらは、いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねる基礎看護学実習で得られた知見とし、本稿を、基礎看護学実習における「不易流行」というタイトルとした。

## V. 利益相反

本稿における利益相反は存在しない。

## 謝辞

本稿の執筆者は、2022年度基礎看護学実習「看護実践の基礎」の科目責任者と実習形態の変更に関与してプログラムを設計・運営した教員である。実際は、トランスレーショナル看護領域や非常勤助手として実習指導を担っていただいた教員の皆様、そして臨床実習を受け入れて下さった病院看護部の皆様のご尽力により基礎看護学実習が成立しており、ここに深く感謝の意を申し上げます。

## 引用文献

朝倉真弓. (2022). 【学校と臨床の連携が鍵を握る 臨床判断能力育成の試み】(PART5) 事例 臨床判断能力を向上させるしかけづくりと学生の心理的安全性. 看護展望, 47 (3), 0217-0221.

浅野美知恵. (2020). 基礎教育におけるトランスレーショナル教育の試み. 東邦大学健康科学ジャーナル, 3, 3-12.

馬場好恵, 本田加奈子, 中西京子. (2021). 看護基礎教育の臨地実習における実習指導者の持つコンピテンシー. 日本看護研究学会雑誌, 44 (2), 285-297.

Branch, R. M. (2009). *Instructional Design: The ADDIE Approach*. Springer.

Carl Benedikt Frey & Michael Osborne. (2013). *THE FUTURE OF EMPLOYMENT: HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION?* Oxford Martin School Working Paper September 17, pp.1-72.

土井英子, 山本智恵子, 杉本幸枝. (2010). 基礎看護学実習における看護学生のオレムのセルフケア理論の活用, 中範囲理論を看護過程展開の基盤に向けて. *インターナショナルNursing Care Research*, 9 (3), 73-81.

藤本裕二, 山川裕子, 中島富有子, 高田清佳, 藤崎郁, 楠葉洋子. (2011). 看護学生が臨地実習

において教員および看護師に求める資質と能力. *保健学研究*, 23 (1), 9-16.

藤代知美, 小林淳子, 渡部光恵. (2016). 看護学教育における早期体験実習での学習内容に関する文献レビュー. *四国大学紀要, A (人文・社会科学編)* (46), 183-189.

古村沙織, 松本智晴, 前田ひとみ. (2021). 臨地実習における看護学生の失敗に対する看護教員のかかわりとリスク感性との関係. *日本看護学教育学会誌*, 31 (2), 1-16.

長谷川權. (2007). 「奥の細道」をよむ. 筑摩書房.

Hirsh, D. A., Ogur, B., Thibault, G. E., Cox, M. (2007). "Continuity" as an organizing principle for clinical education reform. *N Engl J Med*, 356 (8), 858-866. doi:10.1056/NEJMs061660

川本俊樹. (2018). VUCAを生きる. *脊髄外科*, 32 (2), 119-120. <https://doi.org/10.2531/spinalsurg.32.119>

川村晃右, 岡本光代, 森岡郁晴. (2022). 看護学生が捉える新型コロナウイルス感染症のまん延に伴う代替実習の利点と課題に関する文献検討. *和歌山県立医科大学保健看護学部紀要*, 18, 41-48.

川嶋みどり. (2010). 優れた看護実践 新しい知の創出とわざの精錬. *日本看護研究学会雑誌*, 33 (1), 15-18.

経済産業省. (2020a). 令和2年版通商白書「コロナショック世界経済の状況」. <https://www.meti.go.jp/press/2020/07/20200707001/20200707001-1.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)

経済産業省. (2020b). 製造基盤白書(ものづくり白). [https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/mono/2020/honbun\\_pdf/pdf/all.pdf](https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/mono/2020/honbun_pdf/pdf/all.pdf) (Accessed Mar. 8, 2023.)

菊池真弓, 若澤弥生. (2022). 臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討. *了徳寺大学研究紀要* (16), 285-296.

小林裕子, 藤井光輝, 片山善友, 児玉真由美. (2018). 基礎看護学実習における看護師のシャドーイングを通しての学生の学び. *国立病院看護研究*

- 学会誌, 14 (1), 35-45.
- 厚生労働省. (2019). 看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 厚生労働省. (2020). 「新しい生活の実践例」. <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000641743.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 厚生労働省. (2022a). 病院報告(令和4年2月概数) <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/byouin/m22/dl/2202kekka.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 厚生労働省. (2022b). 新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について(令和4年7月22日版). [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_26977.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26977.html) (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 久保千春. (2017). 心身医学の不易流行. 心身医学, 57 (12), 1207-1208. [https://doi.org/10.15064/jjpm.57.12\\_1207](https://doi.org/10.15064/jjpm.57.12_1207)
- 黒田寿美恵, 船橋眞子, 中垣和子. (2017). 看護学分野における『その人らしさ』の概念分析, Rodgersの概念分析法を用いて. 日本看護研究学会雑誌, 40 (2), 141-150.
- 道廣睦子, 大植由佳, 小林廣美, 長谷川幹子, 阿部真幸, 板東正巳. (2018). 基礎看護学実習IIにおいて学生がリフレクションを取り上げた場面の特徴. *International Nursing Care Research*, 17 (2), 69-79.
- 文部科学省. (2019). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 第一次報告. [https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt\\_igaku-000003663\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf) (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 文部科学省. (2020a). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 第二次報告, 看護学実習ガイドライン. [https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt\\_igaku-000006272\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf) (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 文部科学省, 厚生労働省. (2020). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について. <https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 文部科学省. (2021). ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業の公募について(通知). [https://www.mext.go.jp/content/20211224-mxt\\_igaku-1415342\\_00004\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211224-mxt_igaku-1415342_00004_1.pdf) (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 永井朋子, 本江朝美. (2022). わが国の看護教員の臨地実習指導における省察的実践に関する文献レビュー. 関東学院大学看護学会誌, 8 (1), 15-18.
- 日本看護系大学協議会. (2021). 「2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査, A調査・B調査報告書」看護学教育質向上委員会. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyouaAB.pdf> (Accessed Mar. 15, 2023.)
- 日本看護協会. 「臨地実習に必要な感染対策」について. [https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/covid\\_19/faculty/index.html?utm\\_source=whats\\_new&utm\\_campaign=20201106](https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/covid_19/faculty/index.html?utm_source=whats_new&utm_campaign=20201106) (Accessed Mar. 15, 2023.)
- 布柴靖枝. (2022). VUCA(ブーカ)時代の家族支援をめぐって. 家族心理学研究, 35 (2), 155-156.
- 小川久喜子, 見城道子, 諏訪茂樹, 吉田澄恵, 原三紀子. (2022). ニューノーマル時代の看護学教育 演習・実習の新たな展開. 東京女子医科大学看護学会誌, 17 (1), 11-25.
- Patricia Benner, (2001 / 2005). 井部俊子(翻訳). ベナー看護論—初心者から達人へ. 医学書院.
- 嶋津佑亮, 船場清三, 小原理恵子, 松田真紀子. (2021). 【COVID-19と教育の新たな試み】COVID-19禍における成人看護学実習IIの報告 学内・オンライン実習から考える今後の実習の在り方. 東都大学紀要, 11 (1), 103-108.
- 総務省統計局. (2022). 2020年基準消費者物価指数, 全国2022年(令和5年)1月分(2023年2月24日公表). <https://www.stat.go.jp/data/cpi/sokuhou/>

- tsuki/pdf/zenkoku.pdf (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 総務省統計局. (2023) . 人口推計 2023年 (令和5年) 2月報. <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202302.pdf> (Accessed Mar. 8, 2023.)
- 鈴江毅. (2022) . VUCAからみた学校保健の現状と課題. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇) , 73, 127-134. 10.14945/00029249
- 鈴木克明. (2005) . e-learning実践のためのインストラクショナル・デザイン. 日本教育工. 学会誌, 29(3) , 197-205. <https://doi.org/10.15077/jjet.KJ00004286879>
- 平良由香利, 梶山直子, 室伏圭子, 鈴木純恵. (2017) . 看護大学生が成人看護学実習におけるシャドウイングから得た学び. 医療職の能力開発, 4 (1) , 1-9.
- 高林範子. (2022) . 【コミュニケーションを苦手とする若者・学生の教育】 VRを活用した看護コミュニケーション教育支援システムの有用性. 看護人材育成, 19 (1) , 59-65.
- 谷口清弥, 武田文, 宗像恒次. (2011) . 看護師の困難からの立直りのプロセスと困難体験が看護に与えた影響. 日本保健医療行動科学会年報, 26, 89-103.
- 宇野智子, 中村円, 飯澤良祐, 首藤英里香, 堀口雅美, 大日向輝美. (2022) . COVID-19感染拡大により学内実習に変更した基礎看護実習2に関する教育実践報告. 札幌保健科学雑誌 (11) , 87-91.
- 除村健俊, 小林真也, 飯尾淳, 井上雅裕. (2022) . オンライン授業の現状と将来—大学教員から見たCOVID-19による授業の変化と学生への影響. プロジェクトマネジメント研究報告, 2 (1) , 16-23. [https://doi.org/10.57323/pmijapan.2.1\\_16](https://doi.org/10.57323/pmijapan.2.1_16)
- 安酸史子. (2017) . 【思考にきく発問】 経験型実習教育に欠かせない発問の力, オープンリード, リフレクション, Iメッセージ. 看護教育, 58(4) , 276-281.